慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 日本の『トーニオ・クレーガー』再翻訳の時代的変遷：デジタル分析、関係的翻訳分析を通じて |
| Sub Title | |
| Author | Müller, Nicole Marion |
| Publisher | 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター |
| Publication year | 2024 |
| Jtitle | 日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.133- 156 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 博士論文要旨 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0133 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』52：133–156（2024.3）

# 日本の『トーニオ・クレーガー』再翻訳の時代的変遷

## ―デジタル分析、関係的翻訳分析を通じて―

Nicole Marion Müller
（ニコル マリオン・ミュラー）

### 1.　はじめに

本稿では、博士論文の研究成果として、トーマス・マン著の短編小説『トーニオ・クレーガー』の 15 冊の邦訳の分析の成果を紹介する。同じ原典が何度も繰り返し日本語に翻訳される「再翻訳」（retranslation）は、その変遷自体が翻訳の特徴とその歴史的、文化的、社会的な背景との関係を物語っていると言える。

トーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』の場合には、受容の歴史が教養主義の学歴エリートの歴史と直接結びついており、それぞれの邦訳の特徴から当時の日本における翻訳文化、つまり、訳者が原典のどのような特徴を優先したのかということが分析を通じて理解することができる。20 世紀の日本の翻訳文化の一部は、教養主義の影響を受け、原典に対する忠実性に重きを置く「学術的翻訳方法」によって形作られてきた。それに対して、2000 年以降は、自然な日本語に重きが置かれた意訳も増えてきた。その翻訳文化のパラダイムシフトを、『トーニオ・クレーガー』の 15 冊の邦訳の比較対照を通じて、その類似度を「共通訳[1]」と「固有訳[2]」という現象に注目しながら、最先端のデジタル方法を用いて分析を行った。

## 2. 研究対象

トーマス・マン著の短編小説『トーニオ・クレーガー』は、ドイツ語の初版が 1903 年である。『トーニオ・クレーガー』は教養主義の学歴エリートによって愛読された小説で、翻訳の受容と歴史的な背景との関係について検討するに値する例である。また、この作品は、1927 年の実吉捷郎による初訳から 2018 年の浅井昌子の新訳まで、同じ原典に基づく邦訳が 90 年間に合計 15 冊（表 1 参照）も出版されてきた事実から、日本の翻訳文化における重要性は明らかだと考えられる。この作品が描く若い主人公トニオの芸術、教養、人生に対する葛藤の姿は、トーマス・マン自身の姿では

表 1　『トーニオ・クレーガー』邦訳 15 作品一覧

| 出版年 | タイトル | 翻訳者 | 出版社 |
|---|---|---|---|
| 1927 | トニオ・クレーゲル | 実吉捷郎 (日野捷郎) | 岩波文庫 |
| 1928 | トニオ・クレーゲル | 六笠武生 | 南山堂書店 |
| 1940 | 愛の孤独 | 豊永善之 | 三笠書房 |
| 1941 | トニオ・クレーガー | 竹山道雄 | 新潮社 |
| 1949 | トニオ・クレゲル | 高橋義孝 | 新潮文庫 |
| 1955 | トーニオ・クレーガー | 浅井眞男 | 白水社 |
| 1963 | トーニオ・クレーガー | 佐藤晃一 | 集英社 |
| 1965 | トニオ・クレーゲル | 福田宏年 | 中央公論社 |
| 1966 | トーニオ・クレーガー | 森川俊夫 | 三修社 |
| 1968 | トニオ・クレガー | 野島正城 | 講談社 |
| 1970 | トーニオ・クレーガ ー | 植田敏郎 | 旺文社 |
| 1973 | トニオ・クレーゲル | 片岡啓治 | 立風書房 |
| 1990 | トーニオ・クレーガー | 圓子修平 | 集英社 |
| 2011 | トーニオ・クレーガー | 平野卿子 | 河出書房新社 |
| 2018 | トニオ・クレーガー | 浅井晶子 | 光文社新訳文庫 |

ないかということも頻繁に指摘され、当時、教養主義の学歴エリートが抱えた葛藤にも重なる。さらに、この作品が主人公のいくつかの「告白」を中心に展開する流れは、20 世紀初めの日本の私小説として捉えられたことも多くの愛読者を生んだ一因となったのである（Oguro 2004: 151; 村田 1991: 180）。

特に実吉訳（1927）は、教養主義の培地であった旧制高等学校で愛読され（高田 2006: 20–21, 26）、20 世紀日本の人文科学において制度化されてきた教養主義（Maeda2010:142）と同様、学界、特に独文学の中心的作品となり、教養主義的な翻訳伝統の出発点となった。

## 3. 研究目的

トーマス・マン著『トーニオ・クレーガー』の 15 冊の邦訳をトピックモデルのデジタル方法を通じて計量的分析ならびに定性的分析を行い、教養主義との関連も検討しながら 20 世紀の日本の翻訳文化の特徴を浮き彫りにすることを目標とする。

## 4. 研究方法

翻訳の伝統を検討するためには、原典と邦訳の関係のみならず、同じ原典の幾つかの邦訳間の関係性や類似度も考察の対象に含める必要がある。この立場を「（翻訳の）関係的分析」と呼ぶ。この関係的分析の研究を行うために、元々社会学的な研究のために開発されたソフトウェアである Topic Explorer を利用することにし、翻訳の関係的分析に合わせて、デジタル翻訳分析のための新たなツールを開発して利用した。本研究は、計量分析のためのデジタル分析の方法のほか、定性的な分析のために再翻訳研究ならびにトーマス・マン研究を三つの柱とし、研究を進めた。

## 5. 先行研究

デジタル分析の方法、再翻訳研究、トーマス・マン研究という三つの研究分野の先行研究を概観する。

まず、デジタル分析の方法については、Mimno et al. による 2009 年に公表された多言語トピックモデルがあるが、翻訳のデジタル分析の例はまだあまりない。その一例として、日本（Long 2015）やルーマニア（Tanasescu 2020）の翻訳者と出版社の関係についてのネットワーク分析は、デジタル方法が実施されている。そのほか、コーラン（Svensson 2019）やトルストイの長編小説『アンナ・カレーニナ』（Theimer 2021）の幾つかの英訳間での類似度のデジタル分析もあったが、本稿で紹介する関係的分析とは違って、計量的な分析のみで定性的分析を行わず、かなり抽象的な研究結果となっている。このように、翻訳の類似度の計量に加えて、その特徴の定性的分析まで含むデジタル分析はこれまでまだ存在していないと言えよう。

次に、再翻訳（retranslation）に関する翻訳研究についてである。再翻訳というのは、15 冊の『トーニオ・クレーガー』の場合のように、同じ原典が何回も同じ言語へ訳されることである。「Retranslation」、あるいは「retraduction」という概念は、1990 年に Antoine Berman によって導入されたが、筆者の知識の範囲では、日本の翻訳研究においてはまだ取り上げられていない。「再翻訳」という言葉があるにはあるが、その意味は西洋の retranslation の定義とは全く違い、例えば英語から日本語に訳された文章を、また英語に訳するという場合に使われている。しかし、retranslation は同じ原典を「再び」翻訳するという意味なので、本稿では「再翻訳」を retranslation の訳語として利用していく。

Berman は retranslation という概念を導入したが、同じ原典が繰り返し同じ言語に訳されるに伴って、翻訳の「質」が向上していくと主張し（1990: 1–2, 5）、批判を受けた。例えば Şenaz Tahir Gürçağlar は、再翻訳が質の向上ではなく、原典の正しいと思われる解釈を巡る「翻訳闘争」だと論じ

る（2011: 235）。この再翻訳論を踏まえて Marlies Gabriele Prinzl は本稿と同様、トーマス・マン著の短編小説『ベニスに死す』の 11 冊の英訳をデジタル方法で分析したが（2016）、本研究とは違って計量的な特徴にだけ注目している。

三番目は、日本におけるトーマス・マン研究である。しかし、トーマス・マンの文学作品の邦訳や再翻訳についての分析は非常に少なく、しかもその分析は、2、3 冊の再翻訳（今井 2013、深井 1975）、幾つかの再翻訳の一つの段落や一行（Harweg 1993）の分析に限られている。山室信高（2018）はトーマス・マンの小説の邦訳の課題として Bürger の訳語について検討した。山口知三（2018）は日本におけるトーマス・マン受容に関する本の中で、京都帝国大学の独文学科に焦点を当てた。同様に、トーマス・マン受容の歴史に注目した研究者は村田経和（1991）、堀内泰紀（1994）、小林佳世子（1976）である。更に、高田理恵子（2006）は日本における独文学と教養主義の関連を論じ、トーマス・マン受容も取り上げている。また、日本におけるトーマス・マン受容についてはドイツ語の研究文献も幾つかあるが、年譜の形をしていることが多い（Oguro 2004）。更に、日本の一般的な精神史を論じながら、トーマス・マン受容にも触れるドイツ語の文献もある（Maeda 2010、Keppler-Tasaki 2020）。

## 6. 結果と考察

### 6.1 日本の他律的な翻訳文化の歴史的な由来

翻訳は、古代以来、外国の文化や知識を日本に輸入する機能を果たしてきた（柳父 2010: 32）。その初期の例は、紀元後 607 年にも既に存在した漢文訓読で、最初は中国語の文書を理解するためのアノテーションとして開発されたが、それによって漢文訓読体という日本語の独特の文体が発達した（柳父 2010: 3）。漢文訓読体は、不自然な日本語に対する忍耐を強いられても、むしろ中国語の原典への「忠実性」のためにこそ日本のエリート

に高く評価されていた（Keene 1987: 56, 柳父 2010: 4, 31）。漢文訓読体は、翻訳学者ローレンス・ヴェヌーティ（Venuti 2008: 15）による翻訳論の立場から見ると、日本語を異化させる（foreignize）翻訳文体であり、それが日本の翻訳文化を形作ってきたのである。他の国と比べ、日本では翻訳に際して日本語の自然な表現より外国語に対する「忠実性」を優先する傾向が目立つ（Wienold 2004: 420）。この漢文訓読体のような日本の中国に対する他律性の影響は、日本の翻訳文化全体に及んでいる。その証拠は、17世紀以降、オランダ語の文章の邦訳にも、漢文訓読が転用されたことである（柳父 2010: 5–6, 11）。オランダ語を直接日本語に訳さず、まずオランダ語を中国語の漢字に書き換え、オランダ語の構文に沿った異質の中国語の文章を生み出し、それを漢文訓読するという興味深い方法であった。その結果、日本語の自然な表現は翻訳においては軽視され、外国語に対する忠実性を優先する翻訳文化は、西洋文学の邦訳においても引き継がれたのである。

鎖国が終わった19世紀後半の日本では、西洋による植民地化の脅威を背景として、翻訳は「国家的事業」となった（井上 2012: 3, 柳父 2010: 8）。西洋文学に対する関心が情報源としての価値を持つものから、その作品自体が持つ特徴へと焦点を変えていくきっかけとなったのは、二葉亭四迷（1864–1909）や森鷗外（1862–1922）のような翻訳においても作家稼業においても優れた作品を生み出した作家達である（村田 1991: 166、亀井 1994: 30）。特に鷗外は、自然な日本語を優先し、自分の日本語感覚を踏まえて高評価される訳文を作り出し、ヴェヌーティによる翻訳論では漢文訓読のような異化「foreignization」と違って、「domestication」という翻訳方法を選んだ（Kondo/Wakabayashi 2011: 475）。「domestication」は、翻訳の場合は、原典である日本語の視点から異文化らしさを減じ、自然な日本語に書き換えるという翻訳方法を指す。鷗外とは違って、二葉亭は「foreignization」という翻訳方法を採り、ロシア語原典に忠実にするため、日本語で句読点

の数まで再現しようとした（井上 2012: 99、亀井 1994: 30–31）。二葉亭の翻訳方法は現在の目から見ると滑稽なまでに極端に他律的だと思われるかもしれないが、19 世紀末の原文一致運動、即ち従来厳しく区別されてきた書き言葉と話し言葉の接近を背景として、日本の近代小説に強い影響を及ぼした（井上 2012: 4, 亀井 1994: 33）。

森鷗外の「domestication」に基づく翻訳方法と二葉亭四迷の「foreignization」に基づく翻訳方法という対立は、現在に至るまで日本の翻訳文化の特徴となっている（Kondo/Wakabayashi 2011: 475）。1944 年刊行の『洛中書門』という、ドイツ文学者の大山定一と中国文学者の吉川幸次郎との論争も同じような対立を語っている（川村 1981: 48–49）。大山定一は「domestication」という翻訳方法を代表し、翻訳を「作家と訳者の血と血の結婚」として定義し、訳者は原典の「内的生命」を把握した上で訳文を作るべきだと論じる（大山／吉川 1974: 92）。一方、吉川幸次郎は「翻訳方弁論」という、翻訳は原典をできる限り忠実に再現するべきだと論じ、「foreignization」の翻訳方法を代表している（川村 1981: 52, 65, 井上 2012: 97）。

### 6.2　教養主義と学術的な翻訳方法

ドイツ文学の邦訳では、吉川幸次郎の翻訳方弁論や「foreignization」の翻訳方法に従い、原典を可能な限り忠実に再現しようとする傾向が強い。その傾向は、ドイツ文学の邦訳と教養主義の学歴エリートとの関連に由来すると思われる。教養主義は特に大正時代における、日本の人文科学者を始めとする知識人による欧州文化の受容や理想化であり、旧制高校や帝國大学を中心に流行っていた（松井 2018: 26）。教養主義的な思想の核心となったのは、人格形成への道だと考えられた西洋古典の読書で、最初はゲーテ、1930 年代に入るとトーマス・マンとヘルマン・ヘッセが崇拝された（高田 2006: 19–21, 26）。殊に高校生はマンを崇拝したが、ドイツ語の原典が読める生徒や大学生は非常に少なく、トーマス・マンの作品は邦訳

でしか読めなかった。西洋の古典の邦訳を愛読する高校生が増え、自分で翻訳を作る旧制高校教師や帝國大学のドイツ文学者も珍しくなくなり、学界と邦訳の関係が成立していく（高田 2006:18, Ueda2001: 129, 135）。特にドイツ文学の邦訳は旧制高校や帝国大学の独文学科と直接結び付き、翻訳方便論や「foreignization」に従った学術的翻訳が特徴付けられた。その結果、教養主義の代表的な出版社とみなされる岩波書店も、西洋文学の邦訳は（西洋語で書かれた出版物を含む）1927 年から 1974 年の間に、全出版物の 3 割から 4 割を占めるまでになった（竹内 2007: 163–165）。

トーマス・マン作品の邦訳の読者は殆どドイツ語の原典が読みたくてもまだ読めなかった学生や生徒で、邦訳はドイツ語能力不足を補う逐語訳、即ち学術的な方便の機能も果たしていた。この学術的な翻訳である逐語訳は分かりにくいが、教養主義の学歴エリートに支持された翻訳方法は、分かりにくければ分かりにくいほど、逆に原典に忠実だと思われた。この考えには、漢文訓読も影響を与えたかもしれず、教養主義においても、読書が人格形成の核心とみなされたので、小児の歯を固めるために、お粥などではなく、「固い丸ごとの果実」を食べさせたら良いという説があったほどである（川村 1981: 6）。

このように教養主義の影響を受けた学術的翻訳方法は教養主義と同様、1960 年代に入ると、学生運動等で厳しく批判され始めた。その理由は教養主義的な独文学科の第二次世界大戦前後のナチスとの関連であった（高田 2006: 19, 26–27）。しかし、それに伴って教養主義の評判が落ちる同時に、以前の学歴エリートの思想や理想はある程度大衆化され（竹内 2007: 202–204）、特に西洋古典の邦訳を含めた「世界文学全集」は大人気であった（Ueda 2001: 140）。翻訳の需要の増加の結果、従来、翻訳を行ってきた学者、作家、ジャーナリストのほか、プロの翻訳者という職業の需要も生まれた（井上 2012: 113）。『トーニオ・クレーガー』の邦訳も世界文学全集の一巻として出版されたものが圧倒的に多いが、ドイツ文学者としてでは

なく、プロの翻訳者として『トーニオ・クレーガー』の邦訳を発表したのは、平野卿子（2011）と浅井昌子（2018）しかいない。このように『トーニオ・クレーガー』の再翻訳と学界との結びつきは、教養主義との関連を物語るのである（Oguro 2004: 152）。

### 6.3　翻訳の「関係的分析」の一例

本節では、教養主義との関連が翻訳自体の特徴にどのような影響を及ぼしたか、関係的分析を通じて検討していく。

学術的翻訳方法がよく逐語訳となる事実は、実吉捷郎（1927）の初刊の『トニオ・クルーガー』によって明らかになる。その一例が「Mein Vater, wissen Sie, war ein nordisches Temperament」（GKFA317）という台詞で、実吉訳では原文と全く同じ構造になっている（表 2 参照）:「僕の父は、御承知でしょうが、北方的な気質の人でした」が、原典の構造を挿入句まで再現する邦訳は、実吉訳のほか、圓子訳（1990）と武笠訳（1928）しかない。圓子修平は台詞を「ぼくの父は、ご存知のように、北方的気質のひとでした」というように訳して、実吉と同様コンマまで原典の流れに従う一方、武笠訳におけるその台詞の構造も「僕の父は、御承知の通り北國風の素質の人でした」というかたちだが、原典のコンマの一個はなくなっている。片岡訳（1973）も構造は同じだが、コンマが全て省略されている上、訳語自体も敬語ではなく、「ぼくの父親はあなたも知ってのとおり北方的気質の人間だった」という形で以前の邦訳と比べたら砕けた表現を含む。

これら 4 冊の邦訳と違って、義之訳（1940）を始め、その後に刊行された様々な再翻訳も大体、原典の挿入句を台詞の真ん中から冒頭へ移している。更に、その後の浅井訳（1955）と佐藤訳（1963）では、「wissen Sie」という挿入句が完全に省略されている。先に片岡訳に言及して述べたように、挿入句を冒頭へ移した邦訳の間で、構造が類似していても「wissen Sie」という訳語は逐語訳が多いが、日本語の自然な表現を優先する意訳もある。例えば、森川訳（1966）と野島訳（1968）では、挿入句は冒頭へ移

表 2　「wissen Sie」の様々な訳語

| 翻訳者 | 刊行の年 | 頁 | 「Mein Vater, wissen Sie, war ein nordisches Temperament」 |
|---|---|---|---|
| 実吉捷郎 | 1927 | 123 | 僕の父は、御承知でしょうが、北方的な気質の人でした―― |
| 六笠武生 | 1928 | 229 | 僕の父は、御承知の通り北國風の素質の人でした、 |
| 豊永善之 | 1940 | 114 | ご存知でせうが、僕の父は北方的な氣質の人間でした。 |
| 竹山道雄 | 1941 | 257 | 御承知のとほり、私の父は北歐の氣質の人でした。 |
| 高橋義孝 | 1949 | 117 | ご存じのように私の父は北国の人らしい気質でした。 |
| 浅井眞男 | 1955 | 104 | 僕の父は北方気質でした。 |
| 佐藤晃一 | 1963 | 63 | わたしの父は北方気質でした。 |
| 福田宏年 | 1965 | 432 | ご承知と思いますが、わたしの父は北方的な気質の人でした。 |
| 森川俊夫 | 1966 | 73 | 父のことなのですが、父は北欧的な気質の持主でした、 |
| 野島正城 | 1968 | 304 | 父のことですけれど、父は北方的な気質の人でした。 |
| 植田敏郎 | 1970 | 104 | ねえ、ぼくの父は北方的な気質でした。 |
| 片岡啓治 | 1973 | 323 | ぼくの父親はあなたも知ってのとおり北方的気質の人間だった。 |
| 圓子修平 | 1990 | 318 | ぼくの父は、ご存知のように、北方的気質のひとでした。 |
| 平野卿子 | 2011 | 128 | 前にも言ったように、ぼくの父は北の人によくある気質の持ち主だった。 |
| 浅井晶子 | 2018 | 143 | ご存じですか、僕の父は、北方の人らしい気質の持ち主でした。 |

り、「父のことなのですが、」あるいは「父のことですけれど、」という形になり、ドイツ語の動詞「wissen」の辞書的意味ではなく、「wissen Sie」の語

用論的な意味に焦点が当てられていて、一層自然な日本語に書き換えられている。「wissen Sie」の語用論的な意味は「ご存知」や「知る」というより、むしろ「父」を強調しているので、語用論の面から言うと、森川訳と野島訳は原典の意味に最も忠実であると言ってよいだろう。また、植田訳（1970）も同じように「wissen Sie」の語用論的な意味に注目しているが、野島訳より短く「ねえ、ぼくの父は北方的な気質でした」という訳語になっている。この場合は、「父」の強調ではなく、会話中に相手が聞いているかどうかを確認する「wissen Sie」の用法で、語用論的にはもう一つの意味を表している。更に、平野訳（2011）は、「前にも言ったように、ぼくの父は北の人によくある気質の持ち主だった」という訳語を用いている。挿入句「wissen Sie」を「前にも言ったように、」と訳すことで、会話の相手に対して、父について何回も話したことがあることを明確に含意している。

### 6.4　トピックモデルに基づいた関係的分析のデジタル方法

6.3 で例を挙げたように、関係的分析の例から、二つの事実を指摘できる。

第一の事実は、先に取り上げた平野訳を始め、すべての訳語は原典に対して独特な解釈を含んでいるということである。翻訳方弁論に従い、原典を変更せずに逐語訳をする学術的翻訳方法にしても、原典そのままに訳すということは理想でしかないのである。その理由は、「御承知でしょうが」、「ご存知でせうが、」、「あなたも知ってのとおり」のような逐語訳においても、翻訳者の解釈の部分が入るためである。例えば、尊敬語の有無は、相手との距離を意味することもできる一方で、友人同士の軽い冗談として皮肉で使うという解釈も成り立つ。逐語訳は原典の意味をあまり変えず、一番中立的な翻訳方法と思われるかもしれないが、逐語訳も意訳も、訳者の解釈が含まれるため、それが原典の意味からズレる要因となるのである。

第二の事実は、再翻訳の作品間に影響や類似度の関係があることであ

る。例えば、野島訳は森川訳の 2 年後に刊行され、両訳に「父のこと」という新しい訳語が導入されていることから、野島が森川の影響を受けたことが推測できる。また、「御承知」と「ご存知」という訳語の使い分け等も、邦訳間の関係を物語っていると言える。邦訳間の関係は、類似度に根差すことが多いが、平野訳（2011）の新しい訳語（「前にも言ったように、」）も、従来の訳語を背景として導かれるので、翻訳の関係的分析は影響や類似度のみならず、意識的なズレにも注目すべきなのである。

本研究では、翻訳の関係的分析をデジタル方法において、「共通訳」と「固有訳」という二つの現象として捉える。共通訳というのは、『トーニオ・クレーガー』の全ての邦訳作品の半分以上に当たる 8 冊以上で、ある言葉が同じ語で訳された場合を指す。それに対して、固有訳というのは、従来の邦訳の 3 冊以上で同じ訳語が用いられた後で新しい訳語が現れた場合を指す。

共通訳と固有訳は、トピックモデルのデジタル方法を用いて分析した。まず、『トーニオ・クレーガー』の原典と 15 冊の邦訳に基づくデジタルコーパスを作り、計量的に分析した。この計量分析というのは、様々なコーパス、つまり、原典とその様々な再翻訳のトピック（単語表でまとまった内容的な素材）を、トピックモデルというアルゴリズムによって自動的に見分ける方法である。トピックはテーマと同じ意味を持つが、トピックモデルの設定によって大きく変わり、テーマというより文体、ジャンル等を代表する言葉が同じトピックとなることも珍しくない。

トピック自体の分析も可能ではあるが、関係的分析のためにもっと重要なのは、トピック間の類似度をトピックモデルによって計算する機能である。類似度の計算は、簡単に言えば、ある一定の文章量の中で、トピック A の単語表に入る言葉と、トピック B の単語表に入る言葉が共通していれば共通しているほど、類似度が高いということになる。この方法によって、同一コーパス、即ち同じ邦訳の二つのトピック間の類似度のみなら

ず、二つのコーパス、即ち二つの邦訳のそれぞれのトピック間の類似度まで計算できるのである。

### 6.5 『トーニオ・クレーガー』の邦訳の計量的な類似度のランキング

類似度の計量分析では、一冊の邦訳について、トピックモデルのアルゴリズムが通常いくつかのトピックを見分けるようになっている。二冊の邦訳を対比する場合には、それらのいくつかのトピック間で可能な組み合わせの各類似度をすべて計算し、その平均値を計算して類似度とする。二つの文章間の類似度は、定性的な分析や解釈では恣意的になるので、計量できれば文学研究方法としては画期的な方法となる。

文学的作品を定性的に解釈する場合は、通常、内容語である名詞、動詞、形容詞、副詞に集中することが多いと言えるが、それに対して、トッピクモデルを生かしたデジタル方法の計量的分析では、全ての語類を分析に含めることが可能となる。つまり、内容語に限らず、接続詞、助詞、代名詞などの機能語まで分析に含められ、邦訳間の内容的、文体的な類似度まで測ることができるのである。

この方法を用いて、『トーニオ・クレーガー』邦訳 15 作品について、類似度を計算した。表 3 にランキング形式で整理した。

表 3　類似度のランキング

| 類似度が最も高い組み合わせ | | 類似度が最も低い組み合わせ | |
|---|---|---|---|
| 佐藤晃一 1963 | 竹山道雄 1941 | 森川敏夫 1966 | 六笠武生 1928 |
| 実吉捷郎 1927 | 竹山道雄 1941 | 圓子修平 1990 | 六笠武生 1928 |
| 豊永善之 1940 | 竹山道雄 1941 | 平野卿子 2011 | 六笠武生 1928 |
| 竹山道雄 1941 | 片岡啓治 1973 | 圓子修平 1990 | 浅井眞男 2018 |
| 野島正城 1968 | 竹山道雄 1941 | 圓子修平 1990 | 平野卿子 2011 |
| 植田敏郎 1970 | 竹山道雄 1941 | | |
| 福田宏年 1965 | 竹山道雄 1941 | | |
| 原典 | 竹山道雄 1941 | | |

表 3 は、左側に計量的に類似度が最も高い邦訳ペアを降順で並べ、右側に類似度が最も低いペアを降順で並べてある。表 3 を見ると分かるように、『トーニオ・クレーガー』の原典も分析に含めてある。原典との類似度が高いペアは、表の左側一番下の一組（原典―竹山訳）であるが、枠の太線より上に位置する邦訳ペア 7 組は、それよりも類似度が高いということを意味している。また、類似度の最も高い邦訳ペアは全て竹山訳を含み、原典との類似度が一番高い邦訳も竹山訳にほかならない。つまり、計量分析の面から言うと、竹山訳は日本の『トーニオ・クレーガー』の再翻訳史において、中心的な役割を果たしたと推測できるのである。また、表の右側の類似度が低い邦訳ペアを見ると、最も古い邦訳である六笠訳（1928）と比較的新しい圓子訳（1990）、平野訳（2011）、浅井訳（2018）が含まれていることがわかる。換言すれば、実吉訳（1927）を除くと 20 世紀半ば頃に出版された『トーニオ・クレーガー』の様々な邦訳は、類似度がかなり高く、再翻訳史の「核」と言っていい。一方で、それより古い、あるいは新しい邦訳は「核」から外れていることが、デジタル方法に基づく関係的分析によって明らかになった。

### 6.6 「共通訳」と「固有訳」の関係的分析

6.5 では、計量的分析によって、『トーニオ・クレーガー』の再翻訳史において時代の範囲が区切られ、邦訳とその訳者を「核」と「核ではない＝外縁部」という二つのグループに分けられたと考えられる。その結果を踏まえ、関係的分析の次の段階として、「ズームイン（焦点化）」を行っていく。つまり、分析の基準を変更し、全邦訳間の類似度を計量的に分析してから、類似度の平均値の基本となる各トピック、各段落、各訳語間の類似度に焦点を当てる。特に一つ一つの訳語のレベルにおける変遷を「共通訳」と「固有訳」という現象から見ていく時には、分析に定性的な方法を採用する。「共通訳」と「固有訳」については、既にその定義を 6.4 と注 1、2 で説明したが、ある訳語が共通訳なのか固有訳なのか、あるいはどちら

でもないのかという判断は、ある程度、定性的な解釈によることになる。例えば、先に論じた「wissen Sie」という訳語は、共通訳がなく、浅井訳（1955）で初めて挿入句の「wissen Sie」が省略され、しかも 1955 年以前に刊行された邦訳では「ご承知」という訳語が三つ以上の邦訳に出てくることから、固有訳といってよいのである。それと同様に、森川訳（1966）でも「父のことなのですが､」が「wissen Sie」の新しい訳語として現れたので、その訳語は固有訳なのであるが、野島訳（1968）でも大体同じ訳語が用いられていることから、この場合は固有訳ではないと判断する。共通訳、固有訳の定性的な分析は 3 万以上の訳語を対象に行い、その訳語の分析結果については、それをまとめるために計量的に分析する。このように定性的分析と計量的分析の相乗効果が分析を深化させると推測される。

ここで、訳語の関係的分析の結果をグラフで示す（図 1 参照）。

図 1 は、横軸が邦訳の刊行年を表し、縦軸が共通訳、固有訳のそれぞれの割合を表している。割合というのは、共通訳のラベルを付けた訳語の数が分析に含めた訳語数に占める割合を％で表したものである。固有訳についても同様である。共通訳、固有訳ともに段落のレベルで割合を計算したため、線が複数になっている。一本の線は、ある段落の語の何％が共通訳か、あるいは固有訳かということを表している。

図 1 から読み取れるのは、固有訳の割合を表す線が共通訳の割合を表す線よりずっと低いことから、訳者がそれ以前の邦訳との共通性を優先したということである。分析には内容語だけでなく機能語も含めたので、数の多い機能語によって共通性が高くなったという結論も否定できないが、共通訳の割合が高いことは確かである。

そのほかに注目されるのは、共通訳や固有訳の線に独特の変動があることである。例えば圓子訳（1990）の線をたどると、固有訳の線は低く、共通訳の線が高いという保守的な翻訳方法が見て取れる。それに対して、平野訳（2011）は逆に共通訳の線は低く、固有訳の線が高く、両方の線が交

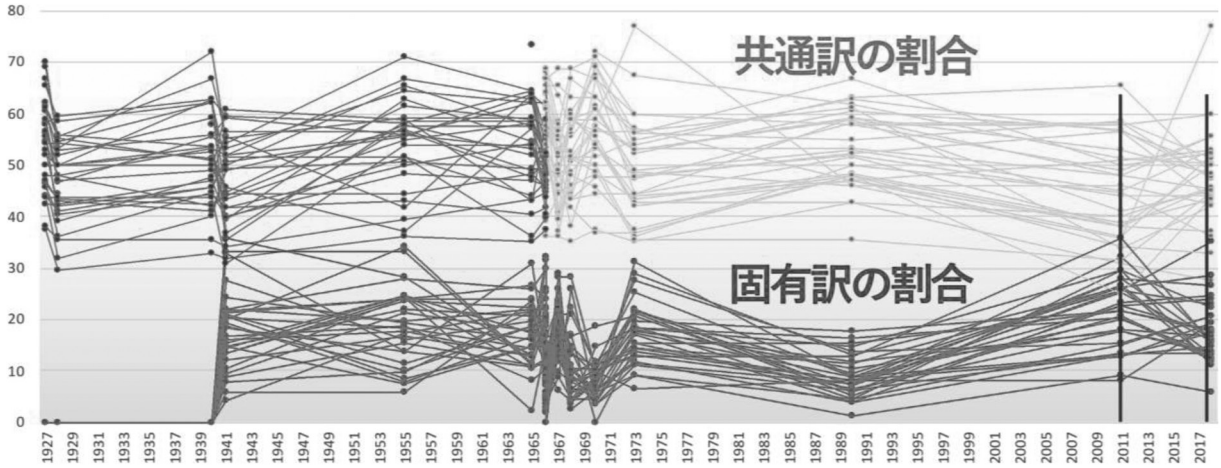


図１　「共通訳」と「固有訳」の時代的変遷

わるという現象が起きていて、平野訳の革新性を物語っている。

圓子訳（1990）では、固有訳の線を構成するデータポイントが相対的に近く、いずれの段落でも固有訳の割合がほぼ同じレベルとなっていることがわかる。それに反して、平野訳（2011）では共通訳の線を構成するデータポイントは分散しており、平野訳では共通訳の割合が段落によってかなり変動することを示している。

このように共通訳や固有訳の割合ならびに変動は、『トーニオ・クレーガー』の個々の邦訳の保守性ならびに革新性を表している。図 1 を見れば、段落による変動がすぐにわかるが、ある邦訳の全体における文体的特徴を知るためには、共通訳と固有訳の平均値が役に立つので、それを表 4 に示す。紙幅の幅の関係で、分析結果をすべて取り上げることができないが、表 4 に挙げた 6 つの邦訳からでも関係的な特徴が明らかとなる。

実吉訳（1927）では、共通訳の割合の平均値が約 54％で、6 邦訳の中で一番高い。実吉訳は『トーニオ・クレーガー』の最初の邦訳なので、訳語の約 54％が以後の邦訳に影響を及ぼしたということである。しかも、武笠訳（1928）と竹山訳（1941）は、共通訳として実吉訳の訳語を継ぐことが可能で、共通訳の高い割合の一因となり得るのだが、武笠訳と竹山訳の

表 4　邦訳の関係的な特徴の平均値

| 翻訳者 | 共通訳の割合の平均値 | 固有訳の割合の平均値 |
|---|---|---|
| 実吉捷郎 1927 | 53, 82 | — |
| 六笠武生 1928 | 46, 93 | — |
| 竹山道雄 1941 | 47, 04 | 17, 96 |
| 圓子修平 1990 | 52, 94 | 8, 92 |
| 平野卿子 2011 | 45, 24 | 21, 47 |
| 浅井晶子 2018 | 47, 45 | 17, 75 |

それぞれの共通訳の割合が実吉訳より低いということも、実吉訳の以降の再翻訳への影響を示している。

この計量分析の結果は、実吉訳の『トーニオ・クレーガー』の翻訳史における位置づけを表していると言える。トーマス・マンの愛読者であった北杜夫と辻邦夫が述べるように「別格扱い」（Yamamuro2018: 226–227）であったことが明らかとなる。実吉訳が以降に出版された再翻訳に及ぼした影響は、実吉が『トーニオ・クレーガー』を最初に邦訳したという事実だけではなく、実吉訳の原典の文章構造への「忠実性」のためでもあったのである。自然な日本語よりも原典の再現を優先する「忠実性」は、漢文訓読体と同様に、学術翻訳方法に従って優れた邦訳の特徴とみなされ、教養主義的な環境においては、逐語訳の日本語が分かりにくいからこそ人格形成を鍛える課題ともみなされたと考えられる。更に、実吉訳が教養主義の代表的な出版社である岩波書店から刊行されたことも、以降の邦訳に及ぼした影響が大きくなった一因だと言えよう。

一方、刊行年代が比較的新しい圓子訳（1990）において、共通訳約 53％という割合が意味するのは、分析対象とした訳語の 53％が以前の邦訳から影響を受けたということを示している。つまり、邦訳が古いほど、共通訳の割合が次に出版された邦訳への影響を示すのである。圓子訳のように新しい邦訳の場合には、それ以降の邦訳は 2 冊しかなく、3 冊以上という基準が満たせないので、新しい共通訳の導入はできないことになり、共通訳の割合は以前の邦訳から受けた影響のみを示しているということになる。同様に、固有訳の定義は「それ以前に刊行された 3 冊以上の邦訳におけるほぼ同じ訳語と違う訳語を導入する」という基準を持つので、実吉訳や武笠訳には固有訳が全くないことになる。圓子訳の場合、共通訳の割合が比較的高いことに伴い、固有訳の割合の平均値が約 9％しかないということもその保守性を示していると言える。それに対して、圓子訳の次の平野訳（2011）では、共通訳の割合の平均値が約 45％でかなり低く、固有訳の割

合の平均値が圓子訳の倍以上に当たる 21％以上となっていて、この計量分析の結果からも平野訳の革新性がうかがえるのである。

### 6.7 『トーニオ・クレーガー』の再翻訳が映す日本の翻訳文化

平野訳（2011）の革新性は、平野卿子が以前の邦訳者と違い、ドイツ文学専門の学者ではなく、翻訳を業とするプロの翻訳家であることと関係があるのは間違いないだろう。かつての『トーニオ・クレーガー』の多くの訳者は、皆、大学に勤めており、学界における高い評価を目指して翻訳を行い、それ以前の邦訳やその訳者に対する敬意を共通訳の形をとって表していたと考えられる。それは、実吉訳（1927）の再翻訳への影響力が 90 年という年月にわたってかくも強く続き、学術的な翻訳の伝統の出発点となったことからもよく分かる。学術的翻訳方法が翻訳の伝統となったのは、日本におけるトーマス・マン受容が教養主義と強く結びついていたためにほかならないのである。教養主義的な翻訳は漢文訓読の影響を受け、原典に忠実であることを優先させ、日本語の自然な表現を軽視したという特徴を持つ。その特徴は 20 世紀の日本の人文科学においても人格形成の手段として高く評価されていたと言えるのである。

また、漢文訓読の原理を引き継いだ学術的な翻訳方法は、日本の西洋に対する自己概念を印象的に物語っている。古代の中国に対する他律性が漢文訓読の形をとっていたのと同様に、20 世紀における教養主義的で学術的な翻訳方法は西洋文化に対する他律性の証左となる。原典の構造に近ければ近いほど良いと考える学術的翻訳方法は、20 世紀の初めのころ、当時の原文一致運動を背景として日本文学に重要な刺激を与えた。その後、その学術的翻訳方法は、現在に至るまで日本の人文科学、特にドイツ文学における翻訳論を形作り、吉川幸次郎の「翻訳方便論」に基づいて、ドイツ文学的な研究活動を支えてきたと言えるが、日本文学の面では成果らしいものは見当たらない。

更に、平野訳（2011）における固有訳の多さの一因として、平野が女性

訳者として初めてトーマス・マンの邦訳を刊行した事実が挙げられよう。漢文訓読と同様に、教養主義的で学術的な翻訳方法は男性の知識人の特権であった（高田 2006:24, 73）ため、女性訳者である平野は、男性の訳者とは違う環境にいたということである。2018 年に新訳を刊行した浅井昌子も、以前の男性訳者とは完全に異なる条件の下にいると言えよう。平野も浅井も、共通訳という形で学術的な翻訳の伝統を引き継ぐことはなく、自然な日本語を優先する固有訳という形をとって学界以外の一般大衆を対象にした邦訳を目指したと考えられる。こうようにして、ドイツ文学にあまり詳しくない一般の読者向けに分かりやすく、原典の異文化的な雰囲気を薄めた新訳を生み出したのだろう。

その『トーニオ・クレーガー』の再翻訳におけるパラダイムシフトは、平野と浅井の個人的な野心としてだけでなく、社会や大衆が女性の翻訳家に対して寄せる期待、日本の翻訳文化の変化にも関係づけられる。かつて、教授でもあるドイツ文学者は学界において絶賛される学術的翻訳を作り出すことを期待された。それに対して、21 世紀の女性の翻訳家による邦訳は、学力の証というより、業務としての翻訳とみなされる傾向がある（徳岡 2002: 31, 70–71）。業務の場合には消費者のニーズに合わせる必要があるので、特に平野の新訳がいわゆる「意訳」に満ちていることは事実ではあるが、それが自由奔放に作られたというわけではない。かつての学術的翻訳が教養主義的な翻訳の伝統に従ったのと同じように、『トーニオ・クレーガー』の新訳はその翻訳の伝統からの解放の第一歩とは言えようが、社会的な期待から解放されたわけではない。

平野訳も浅井訳も、共通訳の割合が以前の学術的な邦訳に比べ低いものの、40％は超えている（表 4 参照）。もちろん、助詞、接続詞の類似性に基づく共通訳もその一部とはなるが、様々な訳語の例を考え合わせれば、浅井が固有訳を導入する場合でも、以前の訳語を踏まえて固有訳を作り出すことが多いということが分かるのである。平野の場合も、図 1 を見れば明

らかなように、共通訳の割合を表すデータポイントが分散していて、学術的翻訳の伝統に従った共通訳の割合が高い段落もある。このように、女性の翻訳家が学術的翻訳方法の伝統から完全には解放されていないことが、計量的分析と定性的分析の組み合わせた結果から判明するのである。

この結果は、視点を変えるとデジタル方法がもたらす可能性を示すと言える。普通の定性的な分析は詳細から全体へと帰納的に進んでいくのに対して、デジタル方法に基づいた定性的分析と計量的分析を組み合わせた方法は、全体から詳細へと演繹的に進めることが可能となる。そのため、視野を最初から拡大させることができ、例えば平野訳において共通訳と固有訳の割合が段落によって変動することが一見してすぐに分かるのである。

## 7. おわりに

本稿では、いくつかの例を取り上げて短くしか論じられなかったが、デジタル方法で共通訳と固有訳のそれぞれの割合を用いて、トーマス・マン著『トーニオ・クレーガー』の 15 の邦訳の関係的分析の結果を紹介した。その分析結果から、教養主義と直接結び付いた学術的翻訳方法が日本における翻訳文化の伝統となり、近年の新訳まで影響を与え続けてきたことを述べた。また、女性の翻訳家による邦訳が、計量的分析と定性的分析の結果によって、以前の邦訳とはだいぶ異なることが実証でき、西洋に対する他律性に基づく翻訳の伝統からの解放の第一歩として位置づけられるのではないかという結論につながった。しかしながら、同時にそれが完全な解放ではないことも分析結果から示唆された。このように、『トーニオ・クレーガー』の邦訳や再翻訳の分析を通じて、日本の翻訳文化の輪郭を明確に描けたと考えられる。

### 注

1 共通訳は、原典のすべての再翻訳の半分以上で、ある言葉が同じ語で翻訳された場合の用語である。『トーニオ・クレーガー』の場合、合計 15 冊中 8 冊以上でその現象が見られれば共

通訳ということになる。例えば、「bürgerlich」という言葉が 8 冊以上で「市民的」と訳されれば共通訳となる。この例からも分かるように、共通訳は訳者が従来の訳文の影響を受けた可能性もあるが、訳者が「自然に」同じ語で訳す可能性も否定できない。関係的分析ではこの二つの可能性の場合をともに「共通訳」と呼ぶが、「影響」と「類似」という言葉の使い分けは言葉の可能な訳語の数を踏まえて判断する。つまり、可能な訳語が一つしかなければ「類似に根差した共通訳」と言い、可能な訳語が複数あるにもかかわらず、半分以上の邦訳である特徴的な訳語が用いられている場合には「影響に根差した共通訳」と言ってよい。

2 固有訳というのは、従来同じ訳語が用いられていたのに新訳が導入されたことを示すために用いる用語である。具体的には再翻訳において三回以上同じ訳語が用いられた後で、新しい訳語が出てくる現象を指す。「三回以上」という条件は必ずしも「連続した三回」を意味しない。この用語も、「共通訳」と同様、訳者が従来の訳語を検討した上で意識的に新訳を導入した可能性のほか、従来の訳語を検討することなく新訳を導入した可能性が考えられる。そのため、ある翻訳家が従来の邦訳を検討したかしなかったかということを、訳語の関係的分析を通じて判断するということである。

## 主な参考文献


[GKFA] Mann, Thomas, 2012,『Frühe Erzählungen 1893–1912』S. Fischer

浅井眞男，1955,『トーニオ・クレーガー、ヴェニスに死す』白水社世界名作選，白水社， 1955, 7–106

浅井晶子，2018,『トーニオ・クレーガー』光文社クラシックス（光文社古典新訳文庫）

福田宏年，1965,『トニオ・クレーゲル（世界の文学 35)』中央公論社， 361–434

平野卿子，2011,『トーマス・マン「トーニオ・クレーガー」他一編』河出文庫， 7–131

片岡啓治，1973,『トニオ・クレーゲル（世界青春文学館第 6 巻)』立風書房，248–325

圓子修平，1990,『トーニオ・クレーガー（集英社ギャラリー「世界の文学」11・ドイツ 2)』集英社， 265–319

森川俊夫，1966,『トーニオ・クレーガー（第 3 巻（全 12 巻))』三修社， 9–76

六笠武生，1928,『トニオ・クレーゲル（独和対訳版)』南山堂書店

野島正城， 1968,「トニオ・クレーガー」,『マン「選ばれた人」,「トニオ・クレーガー」他（Classics of All Ages 28)』講談社，247–305

実吉捷郎，2015,『トーマス・マン作「トニオ・クレーゲル」』，第 10 改訂版（1952 年初版を底本とする）岩波文庫

佐藤晃一，1966,『トーニオ・クレーガー（20 世紀の文学，世界文学全集 20，トーマス・マン、ヘッセ、カロッサ)』集英社， 5–184

高橋義孝，2014,『トーマス・マン「トニオ・クレーゲル」｜「ヴェニスに死す」』第 61 版（1967 年初版を底本とする)，新潮文庫， 7–120

竹山道雄 ，1941,「トニオ・クレーガー」,『混乱と若き悩み』新潮社，119–260

豊永喜之，1940,「愛の孤独」,『愛の孤独．トーマス・マン全集 1』三笠書房， 1–116

植田敏郎，1970,『「トーニオ・クレーガー」他一編』旺文社， 5–106

BERMAN, Antoine, 1990,「 La retraduction comme espace de la traduction」,『Palimpsestes 4』Presses Sorbonne Nouvelle, 1–7

深井均，1975，「『トニオ・クレーゲル』邦訳文献・翻訳の読まれ方」独立大学図書館協会会報 64 号，71–81

GÜRÇAĞLAR, Şenaz Tahir, 2011,「Retranslation」,『Routledge Encyclopedia of Translation Studies』233–236

HARWEG, Roland, 1993,「Sprachstruktur und Übersetzung. Der erste Satz von Thomas Manns Zauberberg-Vorsatz auf Deutsch und Japanisch」,『Poetica 37』Shubun International, 79–100

堀内泰紀，1994，「日本におけるトーマス・マン受容-誕生百年までのその作品と翻訳の鏡に映して」,『大阪経済法科大学論集第 57 号』9–19

今井敦，2013，「トーマス・マン「トーニオ・クレーガー他一編の新訳について」，九州大学文学部トーマス・マン研究会第 99 回

井上健，2012，『文学翻訳の視界・近現代日本の翻訳文化の変容と翻訳』思文閣出版

亀井俊介（編集），1994，『近代日本の翻訳文化（比較文学比較文化 3）』中央公論社

川村次郎，1981，『翻訳の日本語（日本語の世界 No.15）』，4–76

KEENE, Donald, 1987, 『Dawn to the West. Japanese Literature of the Modern Era（Fiction）』Henry Holt&Co.

KEPPLER-TASAKI, Stefan, 2020, 『Wie Goethe Japaner wurde. Internationale Kulturdiplomatie und nationaler Identitätsdiskurs 1889–1989』Iudicium

小林佳世子，1976，「日本におけるトーマス・マン 1930–1945」,『ワイマルの友の会研究報告第 1 号』早稲田大学，3–37

KONDO, Masaomo/WAKABAYASHI, Judy, 2011）,「Japanese Tradition」,『Routledge Encyclopedia of Translation Studies』Routledge, 468–476

LONG, Hoyt, 2015, 「Fog and Steel: Mapping Communities of Literary Translation in an Information Age」*Journal of Japanese Studies* 41(2), 281–316

MAEDA, Ryozo, 2010, 『Mythen, Medien, Mediokritäten. Zur Formation der Wissenschaftskultur der Germanistik in Japan』Wilhelm Fink.

松井健人，2018，「大正教養主義と R.v. ケーベル-ケーベル教養論とその歴史的性格の検討」,『関東教育学会紀要　第 45 巻』，25–36

MIMNO, David, et al. 2009,「Polylingual Topic Models. Proceedings of the 2009 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing」, 880–889

村田経和，1991，『トーマス・マン（人と思想 40）』清水書院

OGURO, Yasumasa, 2004,「Thomas Mann in Japan–Rezeption und neuere Forschung」,『Neue Beiträge zur Germanistik, Band 3/Heft 4』Iudicium, 143–277

PRINZL, Marlies Gabriele, 2016,「Death to Neologisms: Domestication in the English Retranslations of Thomas Mann's Death in Venice」,『International Journal of Literary Linguistics 5.3: Current Issues in the Linguistic Analysis of Literary Translation』1–30

SVENSSON, Jonas，2019，「Computing Qur'ans: A Suggestion for a Digital Humanities Approach to the Question of Interrelations between English Qur'an Translations」,『*Islam and Christian-Muslim Relations*』211–229

高田理恵子，2006，『文学部をめぐる病．教養主義、ナチス、旧制高校』筑摩書房

竹内洋，2007，『教養主義の没落．変わりゆくエリート学生文化』（第 9 版、2003 年初版を底本とする）中央公論新社

TANASESCU, Raluca, 2020,「Chaos out of Order: Translations of American and Canadian Contemporary Poetry into Romanian before 1989 from a Complexity Perspective」,『Chronotopos Vol. 2』 64–94

THEIMER, Sarah，2021,「Identifying Differences between Anna Karenina Translations: Mid-way Findings and Next Steps」 Lightning Talk，Connecticut Digital Humanities Conference

徳岡孝夫，2002,『翻訳してみたいあなたに』清流出版

VENUTI, Lawrence, 2008,『*The Translator's Invisibility.* A History of Translation』Routledge

WIENOLD, Götz，2004,「Translation between distant languages. The case of German and Japanese」,『Übersetzung –*Translation–Traduction* 1』Berlin: De Gruyter Mouton, 415–429

UEDA, Kōji，2001,「Die Bedeutung des Übersetzens in der japanischen Germanistik」,『Eine gewisse Farbe der Fremdheit. Aspekte des Übersetzens Japanisch-Deutsch-Japanisch』Iudicium, 125–149

山口知三，2018,『三つの国の物語．トーマス・マンと日本人』鳥影社

山室信高，2018,「教養市民であることの困難―トーマス・マン「トーニオ・クレーガー」再訪」,『東洋大学学術リポジトリ経済論集 43 巻 2 号』225–244

柳父章，2010,「日本における翻訳―歴史的前提―」,『日本の翻訳論』法政大学出版局，1–34